

星槎大学機関リポジトリ

論文種別	書評
タイトル	三輪建二著『わかりやすい省察的实践—実践・学び・研究をつなぐために』（医学書院 2023年3月刊行）
Title	
著者	古壕 典洋
Author(s)	
誌名	星槎大学大学院紀要
Citation	<i>Seisa University Research Studies in Education</i>
巻	Vol.4
号	No.2
ページ	pp. 18-19
発行日	March 27, 2023
URL	http://id.nii.ac.jp/1486/00000339/

書評

三輪建二著『わかりやすい省察的实践—実践・学び・研究をつなぐために』
(医学書院 2023年3月刊行)古壕 典洋^a

(星槎大学大学院教育学研究科)

1. 万華鏡

不思議な本である。ふれるたびに、本の印象ががらりと変わる。最初の印象は、出来事をなんでも見通す理論書であった。次に手に取ったときは、複雑なものを複雑なままにとらえようとする実践書のように思えた。再びページをめくると、今度はいくつもの声が響き合う現場を記録したルポルタージュのように見えた。理論書、実践書、ルポルタージュ。その時々で本の表情が変わりゆくさまは、まるで万華鏡のようである。

それにしても、本書をどう形容したらよいだろうか。書評は、著者と読者をつなぐ役割をはたす。それゆえ評者は読者に全容を伝えるために、対象物に評者なりの名を与えなくてはならない。だが困ったことに、それにふさわしい表現が見当たらないのである。書名にもとづいて「省察的实践」論に分類しようにも、どこかすわりが悪い。

誤解しないでほしいが、本書は省察的实践もどきを語っている、と言っているのではない。まったく逆である。これから見ていくように、本書は省察的实践のど真ん中を論じている。これまでの成人教育学や省察的实践論を正統に受け継ぎ、おとなの学びを育むという観点から、対人関係専門職における学びを実直に描きだしたのが本書である。本書の構えは明確で、そこで展開される主張も明快である。

にもかかわらず、本書はひとつの言葉で形容することも、ひとつの分野に収めることもできない。じつに不思議である。不思議さの理由は、本書の挑戦とおそらく関係している。三輪建二は、本書で新たな地平を築こうとしているからである。「対人関係専門職」という聞き慣れない言葉がそれを表している。三輪は言う。「専門職をまとめるキーワードとして『対人関係』を取り入れ、『対人関係専門職』ということばを用いることに意味があると思うようになった。……その営みは専門職の学びをめぐる新しい視野の広がりを提供するものになると信じて」(p.5)。

このように本書には、日本の成人学習論を拓き、おとなの学びの本質を追究してきた三輪の、新たな歩みが刻まれている。それゆえ重要なのは、歩みそれ自体に名を与えるのではなく、本書とともに新たな地平を歩むことである。万華鏡の魅力は光学的なしくみを

^a 星槎大学大学院教育学研究科専任講師

知ることよりも、くるくる回したときのあの豊かな体験にこそある。

したがってここから先は、評者の体験を少しだけ記してみたい。しかしその前に、本書がどのような地平を築こうとしたのかについて、本書の概要を確認しておこう。

2. あいだを描く

本書は3部構成である。第1部は、看護職・教育職・福祉職などの「対人関係専門職における学び」が原理的に考察されている。「1. 私たちは対人関係専門職として学び続ける」「2. 私たちは省察的实践者として学び続ける」「3. 私たちは成人学習者として学び続ける」「4. 私たちは学習支援者として学び続ける」「5. かかわり合う相手の学びのプロセスを支援する」「6. 省察的实践のサイクルをらせん的に展開する」の6章から成っている。

第2部は「省察的な記録・レポート・論文をまとめる」と題され、対人関係専門職の論文作成とその指導に焦点があてられている。「1. 省察的に語る・省察的に書く」「2. 課題を絞り込む」「3. 研究目的・研究方法を省察的に設定する」「4. データを省察的に収集し分析する」「5. データを省察的に考察し、結論をまとめる」「6. 経験省察型論文のレポート・論文をまとめ、活用する」といった一連の研究の過程がまとめられている。

第3部「実践と研究をつなぐ指導：実務家教員のことば」では、実務家教員5名の臨床のことばに着目して、大学院教員や論文指導者のありようが検討されている。

さらに本書には【事例と解説】が豊富に盛り込まれており、各章には【コラム】と読者の実践を振り返るための【問いかけ】が用意されている。

では本書は、具体的になにを描いているのか。あいだ、である。本書は対人関係専門職をめぐる、技術的合理性にもとづく「実証主義の認識論」と、省察にもとづく「実践の認識論」のあいだを幾重にも描きだしている。あいだは、第1部では、知の「適用」と「省察」、学びの「形成」と「変容」などの二項を通して論じられ、第2部では、方法の「厳密性」と「適切性」、エビデンスの「普遍性」と「個別性」へと展開し、第3部では、ことばの「抽象性」と「具体性」、対人関係の「技法」と「わざ」として示される。

あれかこれかの二者択一ではない。本書が描く「あいだ」とは、双方が対立しつつ共存を可能とする場のことである。本書の魅力は省察的实践を軸に、対人関係専門職の実践・学び・研究が一体であることを精緻に描いたことにある。そしてまた、省察的实践の存立条件が「あいだ＝共存の場」にあることを解き明かした点も読者を魅了するのである。

3. 2つの光

実践は不確実で複雑、「一寸先は闇」である。そんなとき、本書が築いた新たな地平＝「あいだ＝共存の場」に立つと2つの光が見えてくる。ひとつは、実践者の現在地を知らせる足元を照らす光。もうひとつは、実践者の指針となる行き先を照らす光。2つの光は、学びを希求し、次の一步を踏み出そうとする人びとに勇気を与えることになるだろう。